思いつづる

第4回みんゆう新聞感想文コンクール 最優秀・優秀作品

【小学3・4年生の部】

◆最優秀賞

「おとめ座のスピカ 私の星座」

浮金小3年　生天目　栞さん

今年、私は夏休みの自由研究で「天気の言い伝えって本当かな」と言う題で研究を進めた。毎日、新聞の中の天気図を集めたり、朝夕の空を記録したりと調べながらまとめた。

八月十六日、いつものように天気図を切り取ろうと新聞を広げた時、とつぜん、きれいな月の写真が目に入った。金環日食を見てから、月や星にきょう味を持っていたので、（このたくさん写っている月の写真や小さな星の場所が違って見えるのはどうしてだろう。）ふしぎに思うことが次々に頭に浮かんできて、わくわくしてきた。お母さんやお父さんも「初めて聞いた。」と言っていっしょに新聞を見てくれた。記事には八月生まれの私の星座、おとめ座にあるスピカという星が月にかくされることを「スピカ食」ということが書いてあった。スピカ食のさつえいに郡山市のふれあい科学館が成功したこと、そしてたくさんの写真は、スピカが月から少しずつはなれていく様子が時間を追って写し出されたものだということも分かった。

私はインターネットでも調べてみた。スピカはおとめ座の中で白くかがやく一等星で、その白い清らかなかがやきから、真じゅ星とも呼ばれていることを知り、その美しさを想像するだけで、私の心ぞうはドキドキして、体があつくなった。一ぺんで大好きな星になった。お母さんにふれあい科学館の展望館にも連れて行ってもらった。係の人から、

「二千二十四年にスピカ食が見られるよ。」

といってもらえたことがすごくうれしかった。

今まで、むずかしい話ばかりだと決めつけていた新聞記事。でも私達の目では直接見えなかったことや遠い宇宙で起きている事を知ることができ、新聞を読むことが楽しくなった。スピカは私の星座のように身近に思えた。

◆優秀賞

「かんしゃの気持ちを忘れずに」

平一小3年　草野　夏海さん

お父さんが、わたしに交通安全かつどうでひょうしょうされた新聞記事を見せてくれました。

「あっ！近所のおじいさんだ。」

それは、わたしが毎日通学する道路の横だん歩道に立って、はたをふったり、ふえをふいてわたしたちを交通じこから守ってくれているおじいさんの写真でした。

「このおじいさんは、四十年間も毎日、朝の通学路に立って通学する子どもたちへ交通安全かつどうを続けて、ひょうしょうされたんだよ」と、教えてくれました。

四十年間も、毎朝、交通安全かつどうを続けるなんて、わたしにはできないことなので、おじいさんは、きっとやさしく、心の強い人だと思いました。

わたしたちの学校では、一年生から六年生までまとまって地区ごとに集だん登校をしています。

毎朝早く学校に来て、ふみきりなどのきけんかしょを登校する児童の安全しどうを行ってくれています。

わたしたちの交通安全は、地いきの人たちや、先生方に守ってくれていることが分かります。

わたしたちを交通じこから守ってくれている、おじいさん、両親、地いきの人たち、先生方に心からかんしゃしたいと思います。

◆優秀賞

「ユカが教えてくれたこと」

福島一小4年　梅津　千載君

「冷凍マンモス横浜到着」と新聞に書いてあるのを見て、ぼくは「冷凍マンモス？」とふしぎに思った。写真には、象のような長い鼻が茶色く写っている。よく見ると、足には赤茶色の毛がついている。

「本物のマンモスだ。」

ぼくはびっくりして、大きな声でお兄ちゃんに新聞を見せた。記事には、マンモスはロシア東シベリアの永久凍土で、長い鼻や四肢がほぼ完全に残った状態で発見されたと書いてある。今までぼくが博物館や本で見たマンモスは骨かくだけで絵はそうぞう図だった。皮や毛がついた本物のマンモスを見られるなんてすごい。しかも見つかったマンモスは、十歳の女の子で「ユカ」と言う名前だ。ぼくも十歳になる。少しふしぎだけど、とてもうれしい気持ちになった。

マンモスは、気候の変化や人類の食料としてぜつめつしたと言われている。日本でもカワウソやオオカミ、トキがぜつめつしてしまった。それは、人類が生きるためにつかまえたり、便利にするために住んでいる場所をこわしたりしたからと言われている。今も地球のどこかで、ぜつめつする生物はたくさんある。地球で生きているたくさんの命を守ることができるのは、生きるために勉強して、言葉と道具を上手に使っているぼくたち人類だ。

大昔からタイムマシンに乗ってきたように今の地球に再び現れたマンモスユカは「マンモスはこんなふうに生きていた。」ではなく、「本当は生きてみんなに会いたかった。」と、命の大切さを教えてくれているように思えた。

これからユカと会うたくさんの人は、未来の地球とそこで生きている全ての命が、幸せにくらすために、人は何ができるのか考えてほしい。

◆優秀賞

「夢へのちょう戦」

泉北小4年　白土　愛理さん

私がこの記事を選んだ理由は、出航した場所が私の大好きな場所、アクアマリンふくしまが見える小名浜港だったからです。

2011年の東日本大しんさいでは、大きなひ害を受けて、たくさんの魚達も死んでしまいました。たくさんの人達がつらく悲しいけい験をしましたが、今では以前のようなにぎわいにもどってきました。もう一つあります。全盲の岩本さんが、小型ヨットで太平洋横だんという夢をかなえようとしたことに、心を打たれたからです。

前に私は、がん科に行ってけんさをするために目薬をさしました。すると、だんだんぼやけてきて回りがあまり見えなくなりました。短い時間でしたが、目が見えづらいだけでとても不安になりました。私の目が見えなくなったら何をするのも大変だろうし、家族や友達の顔も見えなくてかなしいと思います。

今回のちょう戦は、残念ながら失敗に終わりましたが、岩本さんも辛坊さんも無事に救出されてよかったです。夢をあきらめずに、いつかまたチャレンジしてほしいです。今度は必ず成功してほしいと思います。

私はこの記事を読んで強く感じたのは、夢を持つことのすばらしさと夢をあきらめないい心の強さです。岩本さんが福島県を出発に選んだ理由に「ひさいされた人に心のきずを治すきっかけにしてもらえばと思う。」と話していた言葉もとても心に残りました。

私はしょう来、通訳士になる夢があります。通訳士になるのは、きっとかん単なことではないでしょう。たくさん勉強して、むずかしいテストも受けなければなりません。もし、私がくじけそうになっても、チャレンジする気持ちを忘れずに、絶対に夢をかなえたいです。

◆最優秀賞

「マララさんと共に」

二本松北小5年　渡辺　弥生さん

私がマララさんのことを初めて知ったのは、彼女が頭を撃たれたときだった。パキスタンに住んでいたマララさんは、女子教育を認めない武装勢力に銃撃されたのだ。正直に言って、とてもショックだった。私とそんなに変わらない年の女の子が、勉強がしたいと言っただけで本当に死ぬような目にあったからだ。

でも、そんなマララさんが元気を取りもどし、この夏、国連本部で演説したという記事を読み、うれしくなった。彼女は、「一人の子ども、一人の先生、一冊の本、そして一本のペンで世界を変えることができる。それが一番強い武器」だと訴えたそうだ。

みんなが教育を受けられること。これが、マララさんが一番大切にしていることだ。それは、私達日本の子供にとっては当たり前で、マララさん達にとっては当たり前ではない。日本では男女関係なく毎日学校へ行って学べるのに、そのありがたい権利を放り出している人もいる。彼女はどう思うだろう。とても不思議に思うのではないだろうか。

学ぶ機会を与えられないということは、将来とても苦労するということだ。自分の道を切り開くための「武器」を持てないということだ。マララさんの目には、差別や暴力、貧困のため学校に行けない女の子が進む悲しい道が見えている。だからこそ、自分の命をかけてまで活動を続けているのだろう。

学校は、新しい世界を少しずつ広げてくれる場所だと思う。世界中のみんなが平等に教育を受けて、自分の知っている世界を広げられるようになること。そうなることを願って、私も学んでいきたい。そして、未来をつくる「武器」を手に入れた私達が大人になったとき、手を取り合って、世界を少しでもよい方向に向けていけることを信じたいと思う。

◆優秀賞

「諦めない夏つらぬくを読んで」

城北小5年　芳賀　愛さん

私は、避難生活の中で友達と別れても、野球を諦めず甲子園を目指した「相双福島」チームの福島大会の記事を読みました。高校野球のことはあまり知らないけど、この記事を読んで、仲間同士の支え合いや、諦めない強い心を持つことの大切さを知りました。

恵まれない環境の中で、二つの学校の仲間十人が練習してきた事は、自分がやっている合奏に似ています。相双福島チームの十人の目標は、甲子園に行くことです。私の合奏部も、夏の県大会から東日本大会への出場が最終目標です。そして、野球も合奏も個人戦でなく、団体戦であることも一緒です。私の合奏部も、人数がギリギリです。厳しい練習にたえられず、辞めたくなったりする友達もいました。そんな時は、いつも、先生やみんなではげまし合ってきました。一人も辞めてほしくないです。みんなと二つにまとまる事は、かんたんではないんだなあと思いました。記事にも、十人がいろんな苦労をしてきたと書いてありました。一番おどろいたのは、週末に三時間もかけて車で移動し、合同練習をしてきた事です。震災や原発事故は、この様に色々な人に影響を与えているのです。それでも、めげずに野球を続けてきたことは、すごいです。十人の心が一つになっていたのだと思います。

相双福島も私達の合奏部も、最終目標には行けませんでした。でも、結果ではないと思います。仲間を大切にし、目標に向かって努力した人は、後悔なんかしないのだと思います。試合を終えた鈴木選手もそう言っています。私も、県大会では精一杯頑張りました。でも悔しい気持ちもあります。次の大会では、みんなと心を一つにし、いい演奏ができるように頑張りたいです。みんなで全国大会に行きたい！という夢を持ち、諦めない強い心で頑張ります!!

◆優秀賞

「百年後のことも考えられる人に」

原町二小6年　宮原　由気人君

「温泉発電で町おこし」。「県、バイオマス発電支援へ」。この記事を読んで、僕は太陽光発電のほかにも、いろいろな発電方法が考えられ、各地で作られていることを知った。

震災後、僕が住む南相馬市には太陽光発電所が作られた。他にも、津波等の被害で人が住めなくなった場所を中心に大規模太陽光発電施設の建設が計画されている。がれきや漁船が転がっていた場所が、新しいエネルギーを生みだす所になるかと思うと、なんだかうれしくなった。

以前新聞に紹介されていた矢吹町の工場の社長さんは、「次の百年を見据えた環境への最大限の配慮」という気持ちから震災前にメガソーラーを導入したと話していた。そこには自然を大切にする思いと、百年後に暮らす人々への思いやりを感じた。だから、環境や安全を考えた自然の力を借りる発電は、とてもいいものだと僕は思っていた。

ところが、自然を利用した発電にも問題点があるというのだ。「風力発電の騒音抑制」という記事には、音による健康被害を訴える人達のことが書いてあった。他にも煙や廃棄物の問題等、どんな発電方法にも解決しなければならない問題があることを知った。

僕達にとって、電気はなくてはならないものだ。しかし、人にも環境にも安心で安全なエネルギーを作っていくのは、本当に大変なことだと思った。また、僕達が電気を使って便利で快適な生活ができるのは、たくさんの人達に支えられているおかげだということにも気づかされた。それを忘れず、百年後のことも考えながら、僕も佐藤理夫教授が書いたように、電気を「どうやってつくり、どうやって使うか」について、しっかりと考えて生活できる人になろう。

◆優秀賞

「マララさんに学んだこと」

原町二小6年　橋本　奈瑠美さん

昨年、パキスタンのマララさんという少女が女子の教育の権利をうったえて銃でうたれたというニュースを見たとき、私はとてもショックを受けた。私達にとって子供はみんな学校に通って勉強することが当たり前なのにそうでない国があることを知ったからだ。マララさんは大けがをしたが、大手術を乗り越え、国連本部で女子にも教育を受けさせてほしいと演説するというのだ。私は、マララさんの信念の強さに強く心を動かされた。

私はこれまで、正直に言って勉強はあまり好きではなかったし、どうして勉強しなければいけないのかよくわからなかった。でも、もしも現実に女子だけが学校に行くことができなかったとしたらどうなるだろう。簡単な字の読み書きすらできなければ、大人になっても女性が自立して生きていくことはできないだろう。男女同じくきちんと勉強することができてこそ、いろいろな職業が成立し、社会が安定して平和な生活ができるのだと思う。

パキスタンでは、マララさんの行動に影響を受け、国を変えていこうというヒナさんのような人もいる。命がねらわれるかも知れない危険な状況で、本当に勇気があることだ。世界中の人々がマララさん達を助けて協力していかなければならないと思う。

私は、勉強することの意味は、たくさんのことを知り、よく考え、行動できるようになること、そして社会で役立つ人になることだと考えるようになった。毎日学校に行けることにもっと感謝し、マララさん達のことを忘れずに、勉強をがんばろうと思う。私の将来の夢は音楽家になることだ。たくさん勉強してその夢を叶え、音楽を通して社会に役立つ人になりたい。そして、マララさん達の願いにこたえられるような女性になりたいと思う。